

高知市 今昔物語

現在の高知市が「高知」と呼ばれるようになったその名前の由来について、歴史的な視点から探る。

天

正十六（一五八八）年、長宗我部元親が岡豊城から現在の高知城のある大高坂山に移転した。ところが、「四方皆大河にて、しかも北に洞島の洲（略）東に太布が洲 籬が洲 知寄など云 底もなき洲 なれば、たやすく埋草も及ぶ所にあらず、其上奥山より流れ出る水つよく、堤崩れ、町屋へ洪水入る事度々なりしかば、貴賤上下、こはいかにせんとぞ悲しみける」（『土佐物語』巻十五）というありさまで、河川の治水に失敗。同十九年には元親は城を放棄して、現在の桂浜に位置する浦戸城へ移転せざるを得なくなった。

慶

長六（一六〇二）年、土佐に入国した山内一豊は、元親と同じく大高坂山に築城を開始し、同八年に入城式を行い、河中山と改名した。築城工事は着々と進行していったが、城下では相変わらず洪水に襲われ、町づくりは困難を極めていた。

そこで二代藩主・山内忠義は行動に出る。『山内氏時代史料初稿』の慶長十五（一六一〇）



年九月の条に、「山内忠義竹林寺ノ僧空鏡ヲシテ河中山ノ文字ヲ改メシメ高智ト称ス」とある。河中山での築城中に五台山・竹林寺の空鏡和尚に頼み、山名を高智山に改名したのである。

空鏡和尚は、忠義との問答の中で、「高智とは、大聖文珠の浄土を申とかや、抑、城地を何故佛土に比しけるぞと事の意尋れば、此の城より一里計東に山あり、五臺山金色院竹林寺と号す（略）されば此城地も文珠擁護の地と称して、高智山と名付たり」（『土佐物語』）と、改名の理由を述べている。

高智とは、文殊菩薩加護の土地を意味している。五台山から見て西にある河中山を西方浄土になぞらえ、築城や町づくりにより、文殊様の高い知恵を借りたいとの強い思いがあつたよつである。河中と高智とは同じ字首であり、そこからさらに現在の表記・高知に転じた。



がて、高知城が完成。元和七（一六二一）年時点で「土佐守殿借銀今の分には御身上相果つべく候」（藩志内篇）と言わしめるほどに切迫していた財政状況を、藩政改革によって見事に立て直した。

「河中▼高智▼高知」

高知という名称は、このような変遷を辿り、現在に至っている。

やまうち かつとよ 山内 一豊

土佐藩祖
1545 ~ 1605年

尾張に生まれ、織田信長に仕え、朝倉攻めで戦功をたて、長浜唐国400石を領す。関ヶ原の戦いで徳川家康に属し、戦後土佐24万石を与えられ、翌年1月浦戸に入城した後、大高坂山に高知城を築き、領国経営に尽力した。



「山内一豊像」
(土佐山内家宝物資料館所蔵)

ちようそがべ 長宗我部 元親

戦国武将
1538 ~ 1599年

本山氏や一条氏などを滅ぼし、土佐の統一を果たす。その後四国で勢力を強めるが、豊臣秀吉の四国征伐に降伏、土佐一国の領有を許された。元親の行った「長宗我部地検帳」は、当時の社会を知る上でも貴重な文化遺産である。



「絹本著色長宗我部元親像」
(秦神社所蔵・高知県立歴史民俗資料館写真提供)



▶鏡川、江ノ口川の河川を外堀として町割りを形成し、新しい近世城郭を築いた。「かうち之城図」（高知市民図書館平尾文庫所蔵）



▶高知を代表する景勝地「桂浜」の背後の山「帯が浦戸城跡である。」「浦戸城古城之図」（高知市民図書館平尾文庫所蔵）

高知 城下の町名

高知市の町名は、江戸時代から引き継がれた歴史的な町名が多数残っています。これら歴史的な町名を保存伝承するために、平成13年の高知城築城400周年記念行事の一環として標識を旧町域に設置しました。



はりま やちよう 播磨屋町

江戸時代初期、豪商播磨屋と豪商櫃屋の間の堀川に橋が架けられ、それに通じる町筋が通称「ハリマヤ丁」と呼ばれていた。藩政期には播磨屋町（現在ははりまや町）という町名はなく、播磨屋橋という橋とその周辺が城下の中心の商人街となっていた。



おび やまち 帯屋町

江戸時代初期に豪商帯屋助勤が住んでいたことに由来する町名。西端に高知城南門や藩主の下屋敷があり、「御屋敷筋」または「会所筋」とも言われた。その後、町家はなくなり、家老深尾家、五藤家の郭中屋敷、南会所（藩庁）、幕末に活躍した参政・吉田東洋の屋敷などがあつた。

- 升形
 - 鷹匠町
 - 丸ノ内
 - 菜園場町
 - 廿代町
 - 本町
 - 九反田
 - 水通町
- などの町名は現在でも使用されています。